

NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人
長野都市経営研究所

Vol.45

2012.AUG.

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 http://www.nupri.or.jp E-mail: nupri@nupri.or.jp



市川理事長 挨拶骨子

第18回 NUPRI 定時総会開催

新たな「動く組織」として
「観光」を基軸に地域の活性化に寄与。
会員増強にもご協力を。

去る6月21日(木)、第18回NUPRI定時総会がホテル国際21にて会員101社のうち86社(うち委任状43)の出席により開催されました。

市川理事長を議長に、掛谷理事・奥山会員(清水理事代理)を議事録署名人に選任した後、平成23年度の事業・決算報告ならびに平成24年度の事業・予算計画が岩野事務局長より上程され、各議案とも出席者の拍手をもって承認されました。

昨年はNUPRIの組織・活動に停滞感がみられるという共通認識のもと、中長期委員会を立ち上げて、基軸・方向性を検討しました。それを受け、本年度は活動の基軸を「観光」に置き、主体性を持って明確な提案と具体的な行動提起のできる「動く組織」

として、地域の活性化に積極的に寄与していくことについて合意しました。事業部会と活動領域を再構成するとともに、新専務理事に河口明弘氏、新理事に霜田清氏を迎え、今まで以上に能動的なNUPRIの新年度がスタートしました。

議事に続き、NHK教育TV『21世紀ビジネス塾』のキャスターをはじめ、金融・経済への深い知見を生かして中小企業や起業家の支援等に力を発揮している藤沢久美氏の講演会を開催。具体的な事例に富んだ興味深いお話に、一般来場者も含む200名以上の聴衆が熱心に耳を傾けました。また講演後は藤沢氏を囲み、なごやかな懇親会が行われました。

※なお講演内容を抜粋し、次ページ以降に採録しています。

今般、NUPRIではプロモーションビデオの作成、ホームページ刷新、活動紹介リーフレットの制作を行いました。これを機に、改めて設立以来の歴史をふり返ってみました。オリンピック以降、景気が低迷し、経済的にも政治的にも、また国際的にも数々の懸念を抱えているこの時代に、地域の活性化に寄与するという私どもの事業が、いかに地道で困難な事業であるかを再認識しています。

そうした中、昨年は中長期委員会の立ち上げや、若手会員各位の積極的なご参加により、新たな活動の方向性が見えてきまし

た。その基軸となるのが「観光」であり、長野市をハブ化し、長野を「母都市」とする広域観光の可能性を広げていくという大きな構想です。

本日はその実現に向けた事業計画を皆さんにお諮りすることとなりますが、皆様のご理解と、引き続きの多大なご支援をお願いする次第です。また、さまざまな事業は資金を要するものであり、私どもは現在、経営的にきわめて寂しい状況であると告白せざるを得ません。皆さんの活動の地場となる地域発展のために、会員増強にもぜひご協力をお願いいたします。

平成24年度事業計画

【NUPRIの活動方針】

本年度は「観光」の重要性を見直し、長野を「観光母都市」と位置づけ、「広域」かつ自然・食・歴史・文化等多様な観点から観光資源を再発見し、地域全体の活性化に取り組んでまいります。「観光」は、行政の枠にとらわれずに活動でき、客観的な視点で取り組み、大きな経済効果をもって地域の活性化に貢献できる、いわばNUPRIらしさを最も発揮できる要素であると考えます。

具体的には「ここ掘れ！調査隊」による隠れた長野の魅力発掘、シティプロモーション活動、新たなまち歩きイベントの実施などを企画しています。また、会員増強に役立てるための広報ツールも充実させました。なかでもリニューアルしたホームページはユーザー登録すれば皆さんが自由に書き込めるようになっていきます。ぜひご活用ください。

【平成24年度部会・活動部会の事業計画】

1 観光母都市ながの部会

〈部会長〉市村次夫、副部会長／夏目潔・掛谷嘉則

・基本方針

長野市の財産を改めて見直すとともに、隠れた魅力の掘り起こしや新産業創出部会の農業体験との連携により、観光母都市ながのをめざし、滞在型の観光誘致を地域の活性化につなげていくことをNUPRI全体の活動の基軸としていきます。

なお、これまでの「Strategy 2014 研究部会」、「TMO 研究部会」、「長野まちづくりを考える委員」は本部会に集約・統合します。

・ここ掘れ！調査隊活動

〈岩野彰／竜野泰二〉



一般の市民を巻き込む活動のひとつとして、よく知っている地域を新たな目線で調査探索し、観光振興の一助としていきます。既に5月、7月に開催しました。

・門前まち花遊歩（牛に引かれて善光寺参り）

〈鈴木隆治〉



市民の皆様にながの中心市街地に愛着を持っていただくための体験型イベントとして、本年9月1日の第1回開催に向け、具体的な準備段階に入りました。

信濃毎日新聞「Waの会」とのタイアップ、善光寺事務局との連携等、順調に進んでいます。

・シティプロモーション活動

〈松本克幸〉



地域のイメージ向上を図り、交流人口の増加を図ることを目的に、長野市民自らが住んでいる地域に誇りと愛着を持ち、よりよい地域づくりに向けた行動を行う「シビックプライド」をはぐくんでいきます。具体的には地域、学校、企業、家庭等の単位で「寺

子屋」を設け、「人づくり」の場としていくことを考えています。

・中心市街地活性化活動

〈清水光明〉

長野市や中心市街地活性化協議会（事務局・長野商工会議所）などとの連携を深めつつ、NUPRIとしての活動を模索していきます。特に「ここ掘れ！調査隊」、「門前まち遊歩」の活動と連動した「歩きたくなる街」を中心テーマに据え、施策を検討していきます。

・BCP (Business Continuity Plan / 事業継続プラン)

〈掛谷嘉則〉



東日本大震災から防災に強い街づくりの重要性を学びました。地域の安全性は観光誘致においても欠かせないことです。地域住民、企業、諸団体、各施設が連携して取り組むことが防災にも、災害時の復興にも、きわめて重要となりますが、NUPRIとしてこの連携に加わることで、防災における役割を考えることを、活動のひとつとして進めていきます。

2 わいがやサロン活動部会

〈部会長〉岩野彰、副部会長／鈴木隆治

会員の皆様との交流機会を増やすとともに、各分野で広範囲に活躍する方々をお招きし、膝を交えてお話をお聞きし、活発な意見交換を行うことで、今後の活動の参考にし、また組織の活性化につなげていきたいと考えます。より多



くの皆様のご参加をお待ちすると同時に、サロンの講師として呼びたい、話を聞いてみたいという方がいましたら、ぜひ事務局へご一報ください。

3 スポーツ振興活動部会

〈部会長／鷺澤幸二〉

・AC長野パルセイロ支援活動

〈鷺澤幸二〉

AC長野パルセイロのJFL昇格を実現し、さらなる高み「J」へ。その夢に向かって取り組みを進めていきます。専用スタジアム建設を含む「J」昇格活動への協力を中心に、「スポーツ振興によるまちづくり」の活動を継続し、スポーツ全般の普及活動、子どもをはじめすべての世代がスポーツに親しむ取り組みを、長野市、須坂市、中野市とも協力して継続的に推進していきます。

・ユースオリンピック誘致活動

〈霜田清〉



オリンピックスタジアム、エムウェーブ等長野冬季オリンピックの競技施設を持つ優位性を活かし、長野市への「ユースオリンピック」招致を企画し、NUPRIが情報発信源となって市民の合意形成を図る活動を行っています。

4 新産業創出部会

〈部会長／竹内伊吉、副部会長／掛谷嘉則〉

・基本方針

産学共同による新産業創出を研究し、引き続き地域の農業特性を活用して事業化を推進します。生産者から消費者への直接的な販売方法の展開や、農業の事業化に向けた取り組みを進めるとともに、農業を地域資源ととらえ、「体験」「安全・安心」「自然豊かな環境」の視点から、団塊世代の余暇時間への提案を行います。



・採れたて野菜市の継続、拡大

生産者と中心市街地住民とのコミュニティを作り、発展させていくという従来の活動をさらに進め、今期はウェブサイトを作り、「採れたて野菜市の会」（仮称）を作り、サービス向上に努めていきます。また、露地物が減る冬期に対応する加工品の販売も検討します。

・りんごの木のオーナー制度の継続

好評の「信濃三兄弟」のオーナー制度をさらに拡大し、生産内の拡大も視野に入れて活動を進めます。りんごが単なる生産物ではなく、豊かな自然とのかかわりなども含め、情報をメールやウェブサイトで発信し、オーナー制度を原点から見直すとともに、生産農家さんの負担を減らす施策も検討します。

・自然農法の研究、啓蒙

自然農法を実践している部会メンバーの協力を得て研究を進め、過疎地域、限界集落地域の再生、活性化に活かし、地域おこしができるよう行政への働きかけをしていきます。

・中山間地の活性化

自然農法の研究、啓蒙活動と連携し、これまでに蓄積してきた技術やノウハウを具体的に活かす活動の中長期計画を策定し、長野市郊外に広がる中山間地の活性化に役立てていきます。



「未来を拓くビジネス 地域活性化のヒント」

講師 藤沢久美氏

シンクタンク・ソフィアバンク副代表・社会起業家フォーラム副代表
法政大学ビジネススクール客員教授



総会に続き、シンクタンク・ソフィアバンク副代表の藤沢久美氏の講演会が開催されました。

ヨーロッパの経済危機をはじめとする国際的な金融不安や、国内の政治・経済の先行き不透明に、地方の中小企業も翻弄されている今、国内外800社以上の企業や団体への取材や交流の経験を活かし、独自性のある事業の活性化や地域の元気づくりへの指針を語る藤沢氏の講演は具体的にヒントに満ち、NUPRI会員をはじめ参加した皆さんを大いに刺激したようです。

※記載内容は約1時間30分の講演を編集部で抜粋、要約したものです。

現場ががんばる 地方の強み

今、ここへ来る前に、長野市の八幡屋礒五郎さんの本社・工場を見学にかが、社長さんや社員の

皆さんとお話しし、感動してきたばかりです。何に感動したかという、きれいなんです。建物が美しいということだけでなく、どこを見ても整理整頓と清掃が行き届き、社員の皆さんの身なりがよく、立居振る舞いがとても美しいんですね。社長さんがお優しいのに、なぜここまで徹底できるのか、必ず何か秘密があるに違いないと思った次第です。

先週、中小企業の2代目経営者の皆さんとトルコへ視察に行ってきた。ご承知の通りトルコでは今、欧州の先進国にならった大都市化が進み、経済的にすごい勢いで成長していますが、その一方で家族経営の小さな企業が業績を上げ、地方の経済を元気に支えています。

そうした企業の経営者のほとんどが30代です。彼らは口をそろえて言うのです。若者が大都市へと流出していくのは、あこがれもあるが、圧倒的な雇用が大都市にあるから。だから我々には雇用を増やし、欧州化しない文化を継承していく使命がある、そのためにどう事業を行い、会社を大きくしていくかを考えているのだと。トルコの平均寿命は60歳なので、30代はいわば人生の折り返し地点。そこに立った人々

が、自分は経営者として地域や文化のために何ができるかを真剣に考え、行動しています。

政治や社会に対しては自分たちが手本を示し、働きかけていくのだと力強く語るんです。伸びている国の姿そのものです。でも今日、八幡屋礒五郎さんにお邪魔したり、NUPRIのVTRを拝見したりして、日本の地方の現場だってがんばっていると思強く思いました。

東京では中央政治に近いせいか、誰もがとく大きな話をしがちで、しかもみんなが評論家になりがちです。むしろ地方のほうが自分たちで現場を何とかしていこうとする力が強いんですね。そして今という時代は、そういう人々こそが活躍できる時代だと思ふのです。

小さいからこそ決定も行動も早い

ここ数年、国連の地球温暖化に関する会議に出て



いて、しばしば目にする光景があります。かつては先進国といわれる一部の大国だけが発言していた会議ですが、最近では、名前を初めて聞くような小国がしつかり発言し、大国と対等に交渉しています。なぜだろうと思っていたら、実は先進国の元外交官が小国のブレンとして背後で活躍していたのです。彼らは自身の経験と外交手腕を小国に自らアプロチし、首相や政府の参謀となって力を発揮していました。しかも移住はせず、ふだんはスカイプなどを使ってこまめに情報交換し、実際の会議の時だけその場へ行き、強い使命感を持って交渉官として働きます。

インターネットという文明の利器を活かし、たとえ個人であっても実力と行動力と使命感を世界の大舞台で発揮することができる時代です。

事業も同じです。いいものを創っている、いいサービスを持っている企業は、規模に関係なく製品やポリシーに共感を持ってくれる人との出会いによって、全国、世界へとアピールすることができるのです。

京都に日本の伝統工芸技術を持つ職人をネットワークして自社の素材開発力と結びつけ、アート、建築など、さまざまなプロダクトデザインを行って

いる企業があります。ヨーロッパのデザイナーたちがそれに刺激を受け、コラボレートによって素晴らしい製品が生み出されています。大手飲料メーカーのペットボトルのお茶のハイセンスなノベルティなどがここから生まれました。

また、ネームボードを製造しているあるメーカーは、学校の黒板サイズのホワイトボードがあれば便利だと考え、注文に応じて製造・施工できることをインターネットでアピールしました。そうしたらものすごい受注につながった。「ホワイトボード 大型」と検索した人のほぼ100%がその会社のサイトを訪れ、9割方購入に至ったそうなんです。

インターネットはアイデアを持っているいろんな人にいろんなチャンスを与えてくれます。ただし、そのアイデアを世に送り出すスピード感と行動力を持っている人だけが、そのチャンスを活かすことができるのです。とりあえずでも、完成していても、まず出してみる。そうするとネットを通して何らかの反応や意見が寄せられます。それを受け、どんどん改善して完成させればいいのです。

インターネットで起きていることが、世界の常識に変わっていくのが、今という時代です。世の中が変化するときというのは、社会のインフラに合わせて常識が変わっていきます。モータリゼーションがそうだったように、電話から携帯に変わって世の中が大きく変わったように。今、私たちは常識がまさに変化する変わり目にいます。ここで必要なのは、早い意思決定、早い行動力です。キーワードは「とりあえず出してみる」。

組織が小さい方が、それをやりやすいでしょう。国家という単位でみても、今、伸びている国はどちらかといえば専制国家です。企業や地域のレベルでも、意思決定のスピードのあるところ、つまり小さいところが強いですね。

早く発信すれば、早く気づいている人、興味を持つ

ている人がそこに集まってきて、その知恵を借りることが出来ます。このモデルをいち早く創り上げ、うまくいっているのがアメリカという国です。ハーバードやスタンフォードなど大学へ行くと、いろんな国の人々が集まり、知恵が集まっています。Google、Yahoo!、Twitter、facebook……これらはアメリカ人だけではなく、いろんな国の人々のベンチャーによって生み出されました。アメリカが最先端の技術を生み出し続けているひとつの源泉は、知識を生み出す場を作ったことにあると言っても過言ではないでしょう。その真似をしたのがドバイであり、シンガポールです。

新しいものを生み出す時に、必ずリアルな場が必要かといえば、そうではありません。インターネットを使う手もあるし、あるいはインターネットでまず人を集め、リアルな場を長野に設定するという手もありますね。

金型製造企業が情報発信で再起

川崎にある金型製造企業の話です。社長が2代目として跡を継いだ途端にリーマンショックが起きて仕事が激減、売上の9割が無くなってしまいました。社員に求めてもらっても何もすることのない会社で彼がやったことは、事務所・工場をすみずみまで掃除、きれいにすることでした。それでも仕事は来ない。社長は何か新しいことをしなくては、とあれこれ考え始めました。

その時、工場長が社長に言ったのだそうです。「うち金型屋です。仕事のない今こそ、かつてない金型の技術開発ができるチャンスじゃないですか。我々工場のチームが、これまでの蓄積を基に必ず新しい技術を開発します。社長は浮気なんかしていいいで、技術ができた時に売れるよう、自分がすべきことをしてください」と。

先代の時代から会社を支えてきたこの技術者たちを信じようと決めた社長は、自分にできることはなんだろうと考え、毎日ブログを書き、Twitterとfacebookに投稿し始めました。ただし朝30分だけと時間を決め、書き込む内容も、中小企業の経営者が読んでよかつたと思うような内容に限ることを自分に課して、発信し続けました。

するとおもしろいことに、それに興味を持つ経営者さんたちが増えてきて、中小企業の知恵の交流がネット上で行われるようになったのです。そしてついには川崎でオフ会が開催され、全国から何百人もの社長たちが集まり、交流するようになりました。工場長たちが開発した新しい金型の技術もそこで紹介することができました。その結果、地域が違う企業同士が連携し合って新製品を作るという試みも行われています。

規模が小さいから、大手と組めないから、新しいビジネスチャンスを作れないという時代は、もう終わったのです。中小企業同士が互いに知恵を持ち寄り、連携し、あたかも大企業のような組織をバーチャルで作って、前へ進んでいくことができるということです。

ネットを通じて出会った人と、どうやったら連携ができるのか。その答えは「人間力」に尽きます。リアルの世界で人に信頼される人間力のある人が、ネットの世界でも信用を得ているのです。

では大企業はもうダメなのか。決してそんなことはありません。大きな組織は、その中の小さなユニット、つまり現場に任せることで、スピーディーな決定と行動ができます。今、業績を上げている上場企業のさわめて多くが、この方式を採っています。

しかもそうした企業には、現場の社員は新卒しか採らないという共通性があります。現場に任せるためには、「ビジョン」と「価値観」の共有が絶対に必要です。他の企業で経験を積んできた人は、そこで

の常識を持って入社してきますから、新しい会社のビジョンがすんなりしみこみにくい。対して新卒社員はまっさらですから、価値観を共有するスピードが早いし、長持ちもするというのですね。

さらに、判断にあたつての「考え方」、つまり判断する際のポイントを現場に具体的に伝えることが非常に重要です。そうすることで、現場の判断が企業の判断としてブレることなくスピーディーに行われるわけです。

今治のタオルメーカーのコンセプト

そしてもうひとつ、「コンセプト」も重要だと私は考えています。

今治にあるタオルメーカーの話です。その社長も2代目で、お父さんが亡くなったために、急遽Uターンして社長を継ぐことになりました。先代はジャカード織りの技術をいち早く開発し、ブランドのタオルハンカチの製造で業績を上げてきました。ところが2代目が引き継いでみると、試作品の依頼は多いが、量産の段階になるとみんな中国へ行ってしまう。

そこで社長は改めて「タオルとは何か」という原点に立ち返ることにしました。社長が考えるタオルとは、「生まれたばかりの赤ちゃんをやさしく包み込むものだ」でした。それに従い、素材、肌触り、安全性、製造方法、エネルギーや産廃処理、製造サイクルにおける環境負荷に至るまで、すべてを徹底的に突き詰めました。そして10年前、赤ちゃんが口に入れても安全な素材や原料で、自然エネルギーを使って製造する究極のタオルを作り上げ、「風で織るタオル」と名付けました。

これを持って社長は百貨店を回りました。どこへ行っても製品は絶賛されます。しかし小売価格は1枚2500円。「そんな高いタオル、誰が買う?」と相手にしてくれません。でも社長は「こんなにいい



タオルを作ったのに」と、タオルの素晴らしさを発信し続けました。

よく「情報を取りに行く」と言いますが、それは違います。こちらから発信し続けられれば、そしてそれが人の興味を引くものであったなら、情報はおのずと入ってきます。社長には「アメリカの展示会に出したら?」というアドバイスが届きます。ハリウッドのセレブは「プリウス」に乗って環境への配慮をアピールしている。環境にやさしいタオルだつて、関心を持たれるに違いはないと。そして実際にアメリカの展示会でグランプリを受賞したのです。翌日からアメリカのバイヤーが列をなし、帰国した社長をTVの取材や百貨店のバイヤーが待ち受けました。

しかしその1年後、この会社は会社再生法を申請します。TVで大々的に報じられた「風で織るタオル」は、実は売上の1%に満たず、主力だったジャカード織の発注会社の倒産のあおりを受けてしまったとのことでした。

「でも、その1%があつたから、破綻せず再生法を申請してがんばる勇気をもらえた」と社長はおっしゃいました。「風で織るタオル」は、当初百貨店で扱っ

でもえなかったため、細々とネット通販していましたが、いつの間にかタオルを愛するお母さん方の輪が全国に広がっていたのです。「みんなでタオルを買います。何枚買ったら、会社が立ち直れるのか教えてください」：会社再生法申請の知らせを知ったお母さんたちから社長のもとへ、こんなメールが殺到したのだそうです。

いろいろご苦労はあったようですが、こうしたたぐさんの人々に支えられ、社長はついに再生期間を乗り越えます。そして再スタートにあたり、今度は人々に恩返ししたいと、「風で織るタオルファン」を作った全国の方々からお金を集め、タンザニアで生産が始まったオーガニックコットンを買ってタンザニアの農家支援に取り組みます。しかも、まだ品質が平均化せず、年によってコットンの質にバラツキが出るのを逆手に取り、予約制で販売する「コットンヌーボー」タオルを企画して。

銀行がお金を貸してくれないから終わり、ではなく、ビジョンやコンセプトを発信し続ければ、それに共感し、力を貸してくれようとする人が必ず現れます。ファンという手段もあります。しかもファンは応援や支援の輪を広げ、現場を元気づける、



新たな循環を生み出します。

まず動いてみることに、そしてコンセプトやビジョンを持つことがいかに大事か、改めて実感させられますね。

語って起るイノベーション

今の若い方々は、こうしたことにとってもハングリーです。

年配の方々は「今の若者はハングリーさに欠ける」とおっしゃいますが、生まれた時からのお金があふれ、お腹いっぱい育った若者が、ものやお金にハングリーになるわけがありません。若者というのはいつもその時代にないものに対してハングリーなのではないでしょうか。今の時代に欠けているもの、つまり「人を助ける」とか「環境を何とかする」という部分において、今の若者は夜を徹してでも語り合うほどのハングリーさを持っています。

だから私は、事業活動をしているすべての社長さんにお願したいと思っています。皆さんが「何のために事業をやっているのか」、経営者として「社会に対してどんな存在感を示したいのか」を、ぜひ躊躇なく語ってください。これを語ることでできる先輩世代と、インターネットという新しい道具を生まねながらに使いこなし、新しい価値観を持った世代が同時に存在し、互いにコミュニケーションを取ることができる今は、かつてないチャンスの時代です。世代を超えて語り合うと、必ず新しいものが生まれます。よその人の知恵を借りるのも大事ですが、まず社内ですべてはいいと思います。

地域も同じ。まず地域の中で語り合ってください。地域に継承されてきた昔ながらの原点を知っている世代と、新しい道具を使いこなす世代が語り合った時に、現代のかたちとして、うまく進化させることができるはずですよ。

世代間が戦うのではなく、一緒になって考え、行動できる企業や地域こそがイノベーションを起こせるのです。そういう意味では、日本はとてもラッキーな国なんです。インターネットがすごいスピードで普及し、生まれた時からソーシャルネットワークワーカース・ビスを使って生きてきた子たちが社会に出てきた。彼らが先輩たちと「ビジョン」や「働く意義」や「哲学」を共有することにより、新しい道具を使って社会に活かし、次の時代の新しい手本を示すことができる、数少ない国のひとつなんです。

昨年、日本は震災を機に、世界で最も多くのODAを受けました。その額はアメリカの9・11の比ではありません。日本に何かあったらお金を出しましょうという国が、それほどあるのです。日本人の信用度は、日本人が思っている以上に高いのです。今は個と個、地域と地域が直接つながっている時代です。そうした信用を活かし、世界中の人々とつながり、呼んで交流すればいいじゃないですか。まずはとりあえず何でもやってみる、そして発信してみよう。大都市化していないこと、高齢化や過疎などの問題を抱えていることは、逆にラッキーなことなのです。

岡山県の西粟倉村は森林しかない村でした。そこに若者が集まり、雇用が生まれ、スマートグリッドの特長として注目され、未来への力強い構想を持った村となるに至ったのも、そうしたことの結果でした。「葉っぱビジネス」で知られる徳島県上勝町もそうです。小さい地域、問題を抱えた地域が、情報発信と世代間のコミュニケーションによって、元気に生まれ変わった事例です。

日本政府が何をやるかということも大事ですが、それよりもまず、小さな地域が自ら日本、いえ世界のお手本となるようなことを実現する。それができてしまうのが、今という時代なのです。

日本の小さな地域から発信する 未来モデル

この5年間くらいで私は33カ国を訪れました。貧しい国もたくさんあります。そこでは子どもたちが、将来働いて自由を得たいからと、必死に勉強していました。がんばって日本みたいになりたいと言うわけです。彼らにとって、私は未来からやってきた「ドラえもん」みたいなものだったんですね。でも今、日本の大学には「今は自由がない」と嘆く学生たちがいたりする。若者が自由過ぎて何をしたらいいかわからない国、交通事故で多くの人が亡くなり、それよりももっと多くの人々が自殺している国、それがあなたたちの未来だと、彼らに伝えるべきなのではないでしょうか。

また一方で、彼らは私の祖先なんじゃないかとも思ったわけです。素晴らしい未来を夢見て、貧しく、厳しい世の中を生き抜いてきた人々。その人々のおかげで今があることを、私たちは忘れているのではないかと思ったのです。うまくいかないことを、私たちは政治や社会のせいにしてしまいがちだけれど、



私たちは自身は未来のために何ができているのでしょうか。

閉塞した世の中が長く続いている今、しばしば「もう一度焼け野原に戻ればいい」という意見を聞きます。でもそれは、よりよい未来を信じて厳しい時代を必死に生き抜き、今という時代を築いてきた先人への感謝を、あまりにも忘れた考え方ではないでしょうか。見方を変えれば、人類はもう1300年もの間、先人たちの積み重ねを忘れ、打ち壊し、貧しい人々を土台にして新しい時代を築くということを繰り返しています。それをまだ続けるのか……。

そう考えたとき、日本の大切な役割が見えてきました。日本には1000年以上も続く文化や哲学や技術が今も息づいています。その中に新しい世代が

講師プロフィール

国内外の投資運用会社に勤務後、1996年日本初の投資信託評価会社を起業、1999年同社を世界的格付け会社スタンダード・アンド・プアーズ社に売却。
2000年シンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画、現在、副代表。
2003年社会起業家フォーラム設立、副代表。
2005年より法政大学ビジネススクール客員教授。
2007年ダボス会議を主宰する世界経済フォーラムより「ヤング・グローバル・リーダー」に選出

NHK教育テレビ『21世紀ビジネス塾』のキャスターをはじめテレビ・ラジオ・雑誌等を通じ、中小企業やベンチャー企業等800社以上を取材。書籍執筆、雑誌への寄稿、テレビ・ラジオへの出演、各地での講演等を通じ、投資や起業、経済や経営についてのわかりやすい語り口に定評がある。
金融庁、経済産業省、総務省、内閣府等の各研究会委員、金融担当大臣金融経済教育懇談会委員ほか公職多数。

主な著作 『なぜ、御用聞きビジネスが伸びているのか』（ダイヤモンド社）
『子供に聞かせる「お金」の話』（PHP研究所）
『脱・家族経営の心得』（幻冬舎） ほか多数

育っている。焼け野原に戻るのではなく、今こそ持続可能で、喜びや幸せを感じながら働き、生きていける仕組みを地域に作っていったら、それは人類の大発明なのではないかと思うのです。実際、日本には200年も続いている企業がいくつもありますね。そんなことは世界のどこでも例を見ません。ものもお金も豊かになった時、次の新たな成長をどうめざしていくか、そのモデルを実現し、世界に示していくことが一番の社会への貢献であり、人類の進化の鍵なのではないかと考えずにはいられません。